

-5SD を割り高度の脳萎縮であった。病変は白質内に広汎な低吸収部分があり軟化病巣と考えられた。相手は正常のうち、上記と同様なのは1例、他は限局性嚢胞および孔脳症がみられたが、残り3例は嚢胞はなかった。3組の同胞罹患例の5例のCTでは精神遅滞同胞1組2例が正常、1例が透明中隔嚢胞などで萎縮像をみなかった。

〔考察および結論〕

CPにおいて低体重児の占める比率は減少せず、特に高度の低体重児の比率が漸増している。一般人口中の

CPの減少の一因として2,001~2,500gmの軽度低体重群の減少が役割りを果していると考えられる。

双生児は脳障害の原因として無視できないが、その重篤さをCTでみた場合、他方が死亡した場合がもっとも障害の範囲が大で軟化病巣と萎縮が著明であった。しかし、軟化病巣は他方が正常の場合にも存在した。同胞ともに罹患した生存例の場合は脳病変はむしろ軽く、遺伝的なものも可能性があろう。以上、双胎にともなうCPの機序は異種性であろうと考えられた。

多胎児，とくに双生児への養育態度をめぐって

国立精神衛生研究所 池田由子
成田年重
中川幸

〔はじめに〕

現在双胎の出生頻度は分娩1,000につき約6.4といわれている。三胎に至っては分娩18,000につき1.0程度といわれている。わが国の双胎の出生率は遺伝学者によると、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカなどにくらべてはるかに低く、また、一卵生双生児の割合が外国より高いといわれている。いづれにせよ多胎が稀であればある程、よい意味にも悪い意味にも、特別視されることは言うまでもない。とりわけ受胎や出産の機制が未知の闇深く沈んでいる古代や、未開社会では、多胎は超自然と関係づけられ神聖視され、あるいは魔力をもつ不吉な存在として排斥されてきた。戦後の社会や家族制度の著しい変化と共に、わが国の多胎児をめぐる養育態度も変化してきたが、私たちの観察から得た多胎児を持つ母親への指導につき触れてみたいと思う。

〔わが国の多胎児をめぐる態度について〕

わが国では多胎に関する迷信、俗信、偏見があり、現在は減少しつつあるものの、いまだに潜在している。それは五つ子の父親山下氏の手記にも記載されている程である。

多胎に対する迷信、俗信の調査は、第二次大戦後文部省が行なっているが、双生児の出生は「風俗、習慣に反

した不適切な、あるいは不自然な行為をした報い、あるいは親の罪業が子孫に報いる因果応報と解釈されている。

わが国では古代には三つ子が生まれると、稲や食糧が帝より下賜されたという記録が残っていることからみると、多胎は豊かな収穫と結びつけられて祝福されたこともあるようだが、その後封建制度の長子相続を混乱させるという社会的理由や、養育が困難、食べる口がふえるという経済的理由、更に宗教的な因果応報という考え方の影響もあり、忌避、排斥の方向に進んでいる。

私たちが保健所と協力して調査した、千葉県野田市27組、市川市25組の乳児双生児の家族との面接の結果を見ると、妊娠中や出産時に双胎とわかった時の母親の感情は、がっかりした、憂うつになったなど、不快を示したものが36名、60%を占めている。

不快の理由は表1のごとくであるが、その中には、偏見があるという理由を挙げた24名が含まれている。

双生児に社会が偏見を持つと述べたものの中には、大別して双生児に関する迷信や俗信があるとしたもの、社会的評価が低いとしたものがある。それらは表2に示してある。

これらの迷信や気兼ねと、その家の職業、母親の学歴、

表 1 妊娠中・出産時の母親の感情

快	不快	アンビバレンス
4名	36名	12名
快の理由	母体が楽である 育児がたやすい 社会の評価が高い	4名 3名 4名
不快の理由	育児が大変である 偏見がある 経済的に困難 教育が困難 父親がいやがる 家督相続上問題	32名 24名 23名 16名 4名 1名

* 1人で2つ以上の理由を挙げた場合がある

表 2 偏見の理由

迷 信	畜生腹	2名
	性的にだらしない	2名
	悪い血統	2名
	早死してしまう	2名
	欠陥児となる	1名
	心中の生れかわり	1名
社会 の評 価	その他(地域的な迷信)	5名**
	舅・姑・親類への気兼ね	9名
	近隣への気兼ね	9名
	見世物扱いにされる	3名
	世間体が悪い	2名
	高年出産の恥	1名
	その他	1名

** (洗濯物を夜外に干したとか、おなべのふたの上で野菜を切ったなど、だらしない行為の報いというものが多い)。

年齢との関係を見ると、もっとも強く感じているのは、低所得の不熟労働者で63%、これに対し俸給生活者は15%しか意識していない。母親の年齢とは直接関係が認められなかったが、母親の学歴とは関係があり、学歴が中卒以下のものは約52%が偏見や気兼ねを感じ、高卒程度のは約30%意識していたが、大学卒以上のは全く問題にしていなかった。

この52組、104名の双生児は大体順調に生長したものが多く、それでも出生時体重1,700g以下14名、1,701~2,000g 29名もあり、在胎32週4組、36週13組という早産児もあったので、乳児期の育児は母親にとって不安

をひき起すことも多かった。このグループばかりでなく他のグループもふくめた双生児の母親に対するアンケート調査では、約30%が「もっとも育児が大変で苦勞したのは乳児期」と答えている。

拡大家族がへり、核家族がふえ、多胎児の保育者が母親ひとりである家庭がほとんどである現在、この時期の母親の精神的平衡を保つために、父親の協力や、地域の援助は不可欠のものと思われた。

乳児期の戦争のような忙しさを通して次第に母子関係が成立し、最近の小児保健・医学の進歩から身体面に関しては、大部分の双生児は幼児期頃までに単生児に追いついてゆく。

このような理由のため、育児の体験を通じ幼児期にわが子への感情が不快から快に変化してゆくものは約60%である。

これには育児が思いのほかやすかった、双生児であるため社会から好ましい評価を受けたなどの理由が挙げられている。

私たちの興味を惹くのは、単生児の場合稀にしか表現されないような誇張された表現、たとえば「うちの子もたちは社宅中のペットです」とか、「連れて歩くとな人が寄ってきて歩けない程だ」などが開かれることである。

このような場合、双生児は同じ衣服を着せられ、類似性が強調され、そこからまた心理的問題が発生する可能性もある。

双生児か乳児から幼児に無事に成長することは「ふつうの母親に出来ないことをした」という、母親自身の優越感、成就感を満足させる。しかし、双生児の母親グループの約30%弱が、「育児がもっとも大変で苦勞したのは幼児前期」と答えていることは、昨年度の研究報告に見るように幼児期の「ことばの発育遅滞」を心配している母親の多いことを示している。

事実、「双生児相談室」を訪れる幼児のもっとも多い主訴は「ことば」の問題であり、自我意識の発達と共に幼児期に養育環境にも留意すべきことであろうと思われる。

私たちの調査で意外に感じたことの一つは、多胎妊娠の事実が出産直前、あるいは出産時までわからなかった、多胎への精神的、物質的準備が出来ていなかったという例が52組中27組もあったことである。この調査は1967年であり、現在は妊娠中の早期に多胎妊娠が診断され管理されている例が多いと思われるが、第2部の被虐待例などでは、現在でも妊娠中の診断も受けていない母子手帳も持たぬ例もあるので、母親が驚き、不安、拒否などの

反応のあまり、異常な事態を起さないような配慮が必要である。

わが国の双生児に対する態度の特徴の一つは、ほぼ同じに生まれた双生児に対して「兄(姉)」と「弟(妹)」の序列をつけることである。そのような親の割合は、1952年の90%から1967年の40%というように減少している。双生児の名前も減少し、個人的になってきている。しかし、実際に発達の過程を辿ると、最初の意志に反して、二人に兄弟の序列をつけるようになっていく例も多い。兄弟の序列をつけることにより、いわゆる「兄的性格」と「弟的性格」を生じたり、また、異性双生児に「男らしさ」、「女らしさ」を強調して、精神衛生的な問題を起すこともしばしばあり、保育、教育指導の面で特別の注意を必要とすることも多い。

〔多胎児をもつ母親への指導について〕

以上を総括して双胎(三胎もふくめて)に関する育児指導としては、次のことが挙げられよう。

- (1) 「多胎」に関する正しい情報を、小児保健関係者、一般大衆、妊婦などに伝え啓蒙すること。
- (2) 多胎妊娠は出来るだけ早く発見し、妊娠中の管理を厳重に行なうこと。
- (3) 多胎妊娠が発見された時は、妊婦や家族に伝えて精神的、物質的な準備を整えさせること。
- (4) 多胎に関する迷信、俗信、偏見の根拠のないことを十分説得すること。
- (5) 多胎の遺伝や排卵誘発剤についても正しい情報を伝えること。
- (6) 周産期、新生児期の管理を十分に行なうこと、とくに第2子について配慮すること。
- (7) 核家族で唯一の保育者である母親の精神衛生について、とくに新生児期、乳児期に十分注意を払うこと。

双生児のため乳児健診に来所できぬ場合も多いので、保健婦、母子保健推進委員などの家庭訪問や、地域ネットワークの活用が有効である。

(8) 幼児前期にはことばのおくれの問題と、自我発達、情緒的問題などが母親を悩ますことが多い。一卵性、二卵性、異性それぞれの場合に応じて適切な指導が必要である。

(9) 発達を無視した兄弟の序列の強調や、異性双生児の「男らしさ」、「女らしさ」の過度の強調は、時に精神衛生的な問題を生じる危険がある。

(10) 子どもに何らかの心身障害があるときは、「当れば得だが、はずれると大損」という落差が大きく、母親の受ける衝撃が大きい。特殊な医療や教育を受ける場合も2人であるため通えないという不利益があるので援助が必要となる。

(11) 双生児の親の会、ふたごキャンプ、ふたごグループなどのグループワークは、親や子どもの精神健康保持や情報交換にしばしば有効に働くことが多い。

(12) 多胎児に多い未熟児については、一般の未熟児と同様に未熟児としての適切な管理や、未熟室収容による母子関係成立の障害に注意を払うことが大切である。

〔文 献〕

- 1) 池田由子、成田年重、中川 幸、村手保子ほか6名：精神衛生からみた双生児の母親の研究、精神衛生研究、19号、1971.
- 2) 池田由子：さまざまな文化における双生児に対する態度について、精神医学、13巻、2号、1971.
- 3) 古野清人：原始文化ノート、紀伊国屋新書、1967.
- 4) IKEDA, Y.: Cultural and Parental Attitude toward Twins in Japan, Japanese Culture & Behavior. (ed: Lebra, W.), Univ. Hawaii Press, 1975.

被虐待多胎児の事例研究

国立精神衛生研究所 池 田 由 子
成 田 年 重

1. はじめに

本研究班の馬場、増本らの報告にも見られるように未熟児室出身者の中の被虐待児への関心が高まっている。

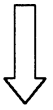
馬場らの報告例はいづれも双胎で、双方あるいは1方が虐待された。

私たちは過去30年の双生児研究の経験から、双胎、三



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔はじめに〕

現在双胎の出生頻度は分娩 1,000 につき約 6.4 といわれている。三胎に至っては分娩 18,000 につき 1.0 程度といわれている。わが国の双胎の出生率は遺伝学者によると、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカなどに比べてはるかに低く、また、一卵生双生児の割合が外国より高いといわれている。いづれにせよ多胎が稀であればある程、よい意味にも悪い意味にも、特別視されることは言うまでもない。とりわけ受胎や出産の機制が未知の闇深く沈んでいる古代や、未開社会では、多胎は超自然と関係づけられ神聖視され、あるいは魔力をもつ不吉な存在として排斥されてきた。戦後の社会や家族制度の著しい変化と共に、わが国の多胎児をめぐる養育態度も変化してきたが、私たちの観察から得た多胎児を持つ母親への指導につき触れてみたいと思う。